

## 病害虫発生予察特殊報 第2号

害虫名 スモモヒメシンクイ

学名 *Grapholita dimorpha* Komai

### 1 発生作物 りんご

### 2 発生経過

スモモヒメシンクイはすももの害虫として以前から知られており、平成13年頃からすももでの被害が増加している。こうした中、平成16年にりんごへの寄生が疑われ、平成17年3月に本種であることが同定された。

品種別には、早生種から晩生種まで被害が発生したが、特に中生種に多発した。ほぼ全県で発生し、特に県北部で被害が多発した。

### 3 形態

チョウ目ハマキガ科に属する小型の蛾で、成虫の体長は7mm前後である。翅は黒褐色で線状の細かい模様がみられる。卵は、長径約0.9mmのやや楕円形で扁平である。果実表面に産み付けられ、孵化後、卵殻は果実表面に残る。幼虫は若・中齢期は白色で頭部が黒く、終齢期は体全体が赤みを帯び、体長が10~13mmになる。

スモモヒメシンクイの形態は全ステージでナシヒメシンクイに酷似する。ただし、雄成虫では区別が可能で、後翅を十分展開させ外縁の形状を比較すると、スモモヒメシンクイは角張っているのに対し、ナシヒメシンクイは丸味のある連続した曲線状をしている。

### 4 生態と被害

フェロモントラップ調査によれば、県内の年間発生回数は3~4回と推定される。フェロモントラップには越冬世代成虫が4月下旬から5月上中旬に誘殺される。その後、第1世代成虫が6月下旬~7月上旬に、第2世代成虫が8月上旬頃に、第3世代成虫が9月上旬頃にそれぞれ誘殺盛期となる。なお、越冬は老熟幼虫が土中で行うとされている。

りんごでの被害は主に8月下旬以降に発生する。孵化幼虫は始め果皮下に隧道を作りながら摂食し、直線状、渦巻き状、放射状など多様な食害痕を残す。その後加害部が変色、腐敗したり、果皮を透かして幼虫が見えることもある。りんご、すもも以外の寄生樹種としてボケ、クサボケが知られている。

### 5 防除対策

- (1)発生生態が解明されていない点も多いが、第1・2世代卵は主にすももに産下されると考えられ、すももでの防除が重要である。シンクイムシ類に登録のある農薬で防除する。
- (2)りんごに対し薬剤防除する場合には、主に第3世代の孵化幼虫を対象に8月中旬から5~7日間隔でシンクイムシ類に登録のある農薬を数回散布する必要がある。
- (3)被害果を発見した場合は、他のシンクイムシ類対策と同様に、土中に埋めたり水没させたりして果実内の幼虫を殺す。

### 6 その他

- (1)スモモヒメシンクイの雄はナシヒメシンクイのフェロモントラップにも誘引されるため、捕獲成虫の後翅形状を調査することで、発生の確認ができる。

(2) スモモヒメシンクイ老熟幼虫は、果実の内側から果皮に楕円形の切り込みを入れ蛹室を作ってその中で蛹化する。蛹室は見つけやすく、また、ナシヒメシンクイは蛹室を作らないため識別できる。ただし、越冬に入る幼虫は蛹室を作らないとされている。

## スモモヒメシンクイ写真

(写真提供:長野県果樹試験場病害虫土壤肥料部)



写真1 無防除の被害果(品種:旭)



写真2 スモモヒメシンクイ雌成虫



写真3 スモモヒメシンクイ雄成虫(後翅が角張る)



写真4 ナシヒメシンクイ雄成虫(後翅が曲線状)